

The background is a vibrant yellow with white line-art illustrations depicting various educational and museum activities. At the top left, a group of children in school uniforms stands together. In the center, a teacher stands at a blackboard, pointing at it while students listen. To the right, a teacher is shown interacting with a child. Below these, a group of children is engaged in a discussion, with one holding a book. In the bottom left, a teacher is seated at a desk, looking at a laptop, while students are seated in front of him. In the bottom right, a group of children is shown in a classroom setting, with one holding a book. The overall scene is one of active learning and collaboration.

長崎県美術館2022

学校とミュージアムの共創

平和教育と鑑賞プログラム開発

ごあいさつ

本冊子は、文化庁令和4年度「Innovate MUSEUM事業」に採択された「学校とミュージアムの共創ー平和教育と鑑賞プログラム開発」の活動記録です。本プロジェクトは、長崎県美術館の所蔵作品をもとに、鑑賞を通して平和について思考を巡らせる、「美術で学ぶ平和教育プログラム」を学校と共創して構築することを目的としています。

美術館にとって学校との連携は、教育普及活動の中核事業の一つです。学校現場においても新学習指導要領で博物館などの社会教育施設との連携や美術館・博物館等の積極的活用が、配慮すべき事項として挙げられています。当館では2005年の開館以来、スクールプログラム等を通して学校との連携を進めており、2021年度は所蔵作品を活用した平和教育の出張授業を行いました。

2022年度はさらに本プロジェクトを深化させるべく、学校現場の先生方との授業案づくりを主軸としながら、それに関連した鑑賞ツール・遠隔プログラムの開発に取り組みました。こども園から大学まで幅広い校種の学校に協力を仰ぎ、それぞれの専門性を活かした連携の形をとりながらプロジェクトを進めて参りました。学校との連携を継続しながら、ここでつくり上げた授業案や鑑賞ツールが学校現場で活用され、さらに改良が進み、今後の美術館活用の幅が広がることを期待しています。

末筆となりましたが、本プロジェクトの意図に賛同し、実行委員会に参画いただいた長崎県、長崎県教育委員会、長崎市教育委員会の関係各位、授業案づくりから実践に至るまで協力いただいた学校の先生方、鑑賞ツール開発や遠隔プログラムに連携・サポートいただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

長崎県美術館 教育普及・生涯学習

目次

ごあいさつ	p.1
プロジェクト概要	p.2
第1部：論考	
「応答する平和教育のために一事実の継承から現在・未来への応答へ」	
山岸利次(長崎大学人文社会科学域教育学系 准教授)	p.4
「鑑賞教育の視点から平和教育を見据えるー学校現場における新しい美術館活用を目指して」	
山口百合子・堀越蒔李子(長崎県美術館 教育普及・生涯学習)	p.6
第2部：活動記録	
1 学校と協働した授業案づくり	p.10
2 テクノロジーを活用した鑑賞ツール・遠隔交流プログラム開発	p.22
コラム「STEAM教育における大学と美術館の協働の可能性」	
金谷一郎(長崎大学情報データ科学部 教授)	p.27
3 教員向け講演会	p.28
4 沖縄視察	p.29
5 シンポジウム	p.30
編集後記	p.32

プロジェクト概要

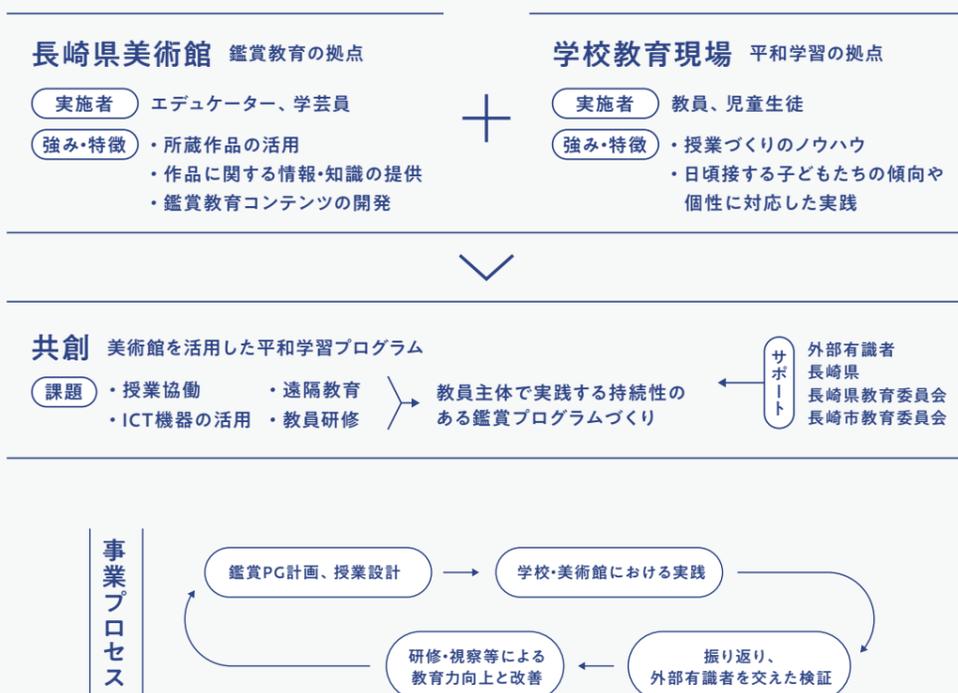
被爆県である長崎県は第三期長崎県教育振興基本計画の主要施策の一つとして平和教育の推進を挙げており、子どもたちの「恒久の平和を希求する態度を育む必要」があるとしています*。県内の小・中・高等学校においても、発達段階に即した系統的な平和学習が行われています。当館では開館当初より対話を伴う鑑賞活動に取り組んでおり、そこでは作品に対する自分の考えを子どもたちが互いに伝え合うことで多様な解釈が生まれていきます。自分の考えを整理して伝え合う鑑賞は自他理解へとつながり、平和教育と結びつくのではないかと考え、昨年度より平和教育に寄与する鑑賞教育プログラムの考案・実施をスタートさせました。

昨年度は、県内の小中学校に協力いただき、所蔵作品の画像を鑑賞し、作品世界を想像して話し合う出張授業を実施しました。今年度は、鑑賞プログラムのさらなる充実と実用性の向上を図るため、小中学校の先生方との協働による授業案づくりを核としたプロジェクトに取り組みました。児童生徒の傾向や特性を熟知する先生からは授業づくりのノウハウ、美術作品を調査・研究する美術館からは作品の情報と鑑賞のノウハウと、両者の専門性を活かした授業案づくりは、長崎大学の研究室との連携による授業・鑑賞に役立つツール開発や、平和教育と鑑賞教育との関連について思考する教員向け講演会の開催にもつながりました。

授業案や鑑賞ツールを広く公開することは、離島など遠隔地の学校を含め、様々な理由で来館が困難な子どもたちに対しても新しい美術館活用の可能性を示唆します。さらに本プロジェクトでは、自分の住む地域の特徴や施設を知る機会として、壱岐市立一支国博物館と連携し、ロボットを介した相互交流プログラムも実施しました。

こども園との遠隔鑑賞プログラム、小中学校の先生方との授業案づくり、大学教員による講演会、大学の研究室とのテクノロジーを活用した鑑賞ツール開発や、ロボットを導入した遠隔交流プログラムの実施など、昨年度に引き続き「学校とミュージアムの共創」を掲げる本プロジェクトは、今年度の各プログラムの実現に際して、様々な校種の先生方や大学生との連携の幅を広げる結果となりました。

*出典：長崎県『第三期長崎県教育振興基本計画 2019-2023年度～長崎の明日を拓く人・学校・地域づくり～』2019年、p.42



論考



論考

応答する平和教育のために —事実の継承から現在・未来への応答へ—



山岸利次
(長崎大学人文社会科学域教育学系 准教授)

はじめに

本事業「学校とミュージアムの共創—平和教育と鑑賞プログラム開発」は美術館の所蔵する作品の鑑賞を通じた平和教育の新たな形を提示しようとするものである。今年度は教材となる鑑賞作品はもとより、教師の教材研究に資する背景知識の検討、作品の自由な鑑賞を子どもに促す教材の開発、具体的な授業展開の提示等、「鑑賞プログラムの開発」の名にふさわしい事業内容が展開された。本稿は、戦後日本の平和教育史の展開を視野に入れつつ、応答(response)という観点からこのプログラムの意義について考察する。

1 戦後日本の平和教育の展開と現在—間接的平和教育と包括的平和教育の問題提起

平和教育とは、一義的には戦争についての史実を伝え、そこから平和や反戦・非戦の意義を教えるものであるが、1970年代に早くもこうした実践は大きな課題に直面することになる。

平和の尊さを伝えるために戦争の非人間性やそこでの悲劇を教えることは平和教育の主眼の1つである。しかし、このことは、ともすると人間不信や悲劇・暴力に対する人間の無力さといった負の感情を子どもたちに喚起しかねないことが実践において次第に明らかになった。平和を希求し構築する主体へと子どもを教育するためには、戦争に関わる事実を継承することは必須であるが、そのことがかえって子どもたちの平和への主体的な関心・関与を阻害しかねないというアポリアを平和教育は抱え込まざるを得ない。こうした困難への対応を模索する中で、間接的平和教育という新たな教育のあり方が現れた。

間接的平和教育とは「文学や歴史の学習」「音楽や絵画制作」「スポーツや集団活動」「仲間づくり」「自然の観察や動植物の飼育栽培」等を内容とし、人権意識や仲間意識、豊かな人間性など、平和教育の基盤となるような人間観・社会観・生命観の形成を意図するものである。名称が示す通りこれは直接に戦争や平和をテーマにするものではない。しかし、人間の尊厳や人権、生命の大切さという、過去の悲劇を受けとめ、そこから平和を構築していくために必要な見方・考え方・感情などを育てるものである。戦争という悲惨な事実と直面し逡巡する子どもたちを前にして、こうした教育の必要性・重要性が発見されたのである。間接的平和教育の生成・展開は、それまでの平和教育の範囲を大きく広げるものであったが、このことは、1980~90年代の新たな平和教育のあり方—包括的平和教育—を準備することとなった。

ヨハン・ガルトゥングを中心とした平和学の発展は「平和」概念の内容を刷新するものであった。一般的には「平和」の対義語は「戦争」であるとされる。しかし、平和学ではそうは捉えられない。平和学においては「平和」の対義語は「暴力」であるとされ、さらにこれは「直接的暴力」・「構造的暴力」・「文化的暴力」に分類される。「直接的暴力」とは一戦争が典型であるが—「暴力」の主体が明確であり、直接に他者に危害を与えるものである。それに対して「構造的暴力」とは貧困や差別、搾取に象徴されるものである。これらは明確な主体が存在しているわけではないが、諸個人の行為・関係が強固な構造をつくりだし、それが「暴力」の源泉となる。「文化的暴力」とは、「直接的暴力」・「構造的暴力」の「暴力」性を隠蔽し、正当化する「暴力」である。そして、こうした「暴力」に対抗するものとして「平和」概念は構想されるのである。

「平和」概念の刷新は平和教育の取り組む内容を大きく変容させるものである。従来の平和教育は戦争やテロといった「直接的暴力」についての学習を中心とするものであった。しかし、「構造的暴力」の発見は、「開発教育」や「人権教育」、「グローバル教育」や「国際理解教育」といった、これまで必ずしも平和教育の内容であるとは認識されてこなかった

ものをそこに位置づけることを求める。さらに、「平和」が対峙すべきものが「暴力」であると措定されると、戦争のようなマクロな「暴力」のみならず子どもたちが生きているミクロな人間関係における「暴力」—その典型は「いじめ」である—も平和教育の取り組むべき課題となる。子どもたち自身の「平和」が脅かされているのは、国家間・集団間のマクロな暴力である戦争や平和についての学習ができるはずもない。その意味では、平和教育がミクロな暴力に取り組むのは必然である。「暴力」の対概念としての「平和」の発見は、平和教育を過去の事実から現在・未来の構想へ、そして、マクロな暴力のみならずミクロなそれへと範囲・方向を拡大させたのである。平和学の発展のもとに提唱された包括的平和教育とはこのようなものである。

2 応答(response)と責任(responsibility)—責任主体の形成と平和教育

平和教育は、史実の継承をしつつも現在・未来における平和を志向・思考するものでなければならない。そして、そのためには従来のものを包含したより広く・深い平和教育が要請される。こうした問題圏においてこそ平和教育における「責任」の問題が浮上する。この問題を考えるにあたり、ここでは、ドイツにおける戦争責任のあり方を参照してみよう。

かつて西ドイツ(当時)の大統領のヴァイツゼッカーは敗戦40年の節目にあたる「荒れ野の40年」と題する講演で次のように述べた。

問題は過去を克服することではありません。そんなことはできるわけはありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。

ヴァイツゼッカー 1986、p.16

現在に盲目とならないために過去に目を向けることは平和教育の主題の1つである。しかし、ヴァイツゼッカーが言うように過去は決して克服することはできない。付け加えるならば、現在・未来に生きる子どもたちは、当然ながら過去にその行為を行ったわけではない。それでは、子どもたちは、克服することのできない過去にどのように向き合うのだろうか。そして、平和教育は、どのように過去と現在・未来をつなげうるのだろうか。

ところで、ドイツ法学者である村上淳一が注意を喚起しているが、日本語の「責任」に対応する言葉としてドイツ法ではSchuldとHaftungという2つの言葉がある。そして、前者は「故意・過失による責任」—その意味で「罪」に連なる「責任」—を、対して後者は「故意・過失が伴わない責任」を意味するものだという。強調すべきは、先の演説において、ヴァイツゼッカー—彼は弁護士でもあった—は両者を対比的に用いているということである。

今日の人口の大部分はあの当時子どもだったか、まだ生まれてもいませんでした。この人たちは自分が手を下してはいない行為に対して自らの「罪(Schuld)」を克服することはできません。

ドイツ人であるというだけの理由で、彼らが悔い改めの時に着る荒布の質素な服を身にまとうのを期待することは、感情をもった人間にできることではありません。けれども、かれらは、前の世代から重い遺産を受け継いでいるのです。

われわれはすべて、罪があろうとなかろうと、老人であろうと若者であろうと、過去を受けとめなければなりません。われわれはすべて、過去のもたらした結果にかかわらずをえず、それについて「責任(Haftung)」を負わされているのです。

同上、p.16(ただし、訳文は村上 2000、p.189に基づき一部変更)

ヴァイツゼッカーは、過去の克服ではなく過去に起因する困難に陥っている他者に対する「責任」を果たすことを人々に要求する。しかも、それはSchuldなきHaftung—「罪」なき「責任」—である。過去の行為に関わっていないからといって「責任」から自由になるわけでは決してない。そうではなく、現在・未来に対しての「責任」がここでは問われている。

ここで、「責任」を意味する英語responsibilityが「応答(response)」と「能力・可能性(ability)」という言葉によって構成されているということは確認されてよい。日本語の「責任」と異なり、responsibilityとは、過去の自己の行為や自分の位置・立場とは無関係に、眼前に存在する他者に応答(response)することのできる能力・可能性を意味するものである。無論、これは先のHaftungに対応するものである。私たちは、こうした「責任」を平和教育に正當に位置づけなければならないだろう。困難を抱えた他者に「応答(response)」する「能力・可能性(ability)」をもった主体を形成すること。これこそが平和教育の目指すところとなる。過去と向き合うことによって初めて過去に起因する現在(・未来)の困難の有り様を知ることが

できる。そして、他者の苦しみを知ることにより自らの「責任」が自覚される。こうした<過去—現在—未来>のつながりこそが平和教育の要諦である。

おわりに—平和を担う「責任」主体の形成のために

戦争を学ぶことを通じて(過去)、他者に応答する主体を育てる(現在・未来)。これこそが平和教育のアルファでありオメガである。そして、そのためには、「困難を抱える他者への想像力・共感力」や「他者とともに<マイクロ・マクロ>の平和を構築することのできる力」を育む教育が要請される。そして、ここにこそ平和教育としての鑑賞教育の意義がある。

教科としての美術教育に収まらない鑑賞教育の可能性については、すでにニューヨーク近代美術館におけるVTS (Visual Thinking Strategies)の実践が多くのことを示唆しているところである。筆者なりの平和教育としての鑑賞教育の可能性を挙げるならば、①作品の解釈について一義的な「答え」がないゆえに、自由で相互的な対話が可能となる、②解釈・対話を通じて他者への想像力・共感力が形成される、③美術作品への鑑賞という行為そのものが、「言語化できないもの」への想像も含め、他者の立場や尊厳についての深い思考へと子どもたちを誘う、ということになる。この点については、今後さらに検討すべき課題であると思われる。

今年度は、小学校・中学校における具体的な教育プログラムが構築された。この成果をさらに発展・深化させることが求められる。

—

引用・参考文献

村上淳一著「罪咎・謝罪・責任」『システムと自己観察—フィクションとしての<法>』東京大学出版会、2000年

竹内久顕著『平和教育を問い直す—一次世代への批判的継承』法律文化社、2011年

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー著 永井清彦訳『荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領演説』岩波ブックレット、1986年

フィリップ・ヤノウィン著 京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳『どこからそう思う? 学力をのばす美術鑑賞—ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』淡交社、2015年

—

※本稿は、本書p.28にある講演内容をまとめたものである。

論考

鑑賞教育の視点から平和教育を見据える

—学校現場における新しい美術館活用を目指して

山口百合子(長崎県美術館 事業企画グループサブリーダー)

堀越蒔李子(長崎県美術館 エducator)

はじめに

本プロジェクトは、小学校・中学校と美術館との協働による鑑賞の授業案づくりを主軸としており、そこには「平和教育」という重要な要素を含んでいる。無論、本プロジェクトにおける平和教育の目的は、山岸利次氏が論考(本書pp.4-6)にて提示した「責任」主体の育成にあるが、その学びに資する鑑賞授業とはどのようなものか。本稿では、鑑賞および鑑賞教育と平和教育の関連性を整理しながら、授業案づくりの意義を考察する。

鑑賞教育と平和教育とを結ぶ「対話」

授業案づくりについて話を始める前に、まずは鑑賞について少し触れておきたい。アメリカの哲学者ジョン・デューイ(1859-1952)によれば、鑑賞(appreciation)とは軽視(depreciation)に対立し、文字や言語を媒介とした間接的な経験ではなく、直接的な経験として、自らの知性や想像力を働かせて事物の真価を味わうものであるという。また、そうした直接的な経験を積み重ねることで、自身の趣味嗜好、ひいてはあらゆる学問分野に通じる価値判断、道徳的価値観などの基準までもが構築されるとする(デューイ 1975、下pp.61-71)。

つまり、鑑賞とは個々の感性や美的感覚を刺激するだけでなく、それらを認識し意味づける知性を必要とする行為であり、その経験は人間形成にまで影響を及ぼすのである。そのような重要な学びの要素を持つ鑑賞は、学校現場でも徐々に重視されるようになり、現在では小学校・中学校・高等学校の学習指導要領の図画工作編・美術編において「A表現」と並ぶ「B鑑賞」として二本の柱を成している。

さて、平和教育との関連を意識する本プロジェクトの授業案づくりでは、鑑賞の手法としてVTS(Visual Thinking Strategies)に着目した。VTSとは、1991年にニューヨーク近代美術館で開発された、対話を介して複数人で美術作品を鑑賞する教育プログラムである。その理念や手法は多くの美術館や博物館に取り入れられており、長崎県美術館でも2005年の開館以来、この手法をもとにした鑑賞プログラムを実施している。

VTSの鑑賞では、ファシリテーターは子どもたちに「この作品のなかで、どんな出来事が起きているでしょうか?」「作品のどこからそう思いましたか?」「もっと発見はありますか?」の三つの質問を投げかけながら、①作品をよくみること、②観察した物事について発信すること、③意見の根拠を示すこと、④他人の意見を聴いてよく考えること、⑤話し合い、様々な解釈の可能性について考えることを促す。この「みる」「話す」「聴く」、そして「考える」鑑賞方法によって子どもたちは、観察力や思考力、それを伝えるための言語能力や傾聴力、記述力など複合的な能力を培う基盤を形成し、対話を通して相互理解を深めることができるのである(ヤノウィン 2015、pp.5-12)。

美術作品と向き合い、根拠を示しながら感じたことを言葉にして伝え合ったうえで、もう一度作品をみて考え、また話す、というサイクルを繰り返すことで、子どもたちは自分の感性や考え方に気づき、他者との相違点を知ることになる。ここでの話し合いとは、統合を目的とした意見のすり合わせ作業ではなく、相違点から新しい気づきを得るための「対話」である。一つの答えを持たない鑑賞において、自分と異なる意見の否定や排除は無意味であり、たとえ自分には納得できない意見が他者から挙がったとしても、対話によって相手の意見の根拠や着眼点などから刺激を受け、一つの意見として受け止めることは可能になるのである。

このような鑑賞教育、特に対話を伴う鑑賞活動で培われる、自己・他者に対する想像力、思考力、コミュニケーション能力などの向上は、平和教育が求める「仲間意識」や「人権意識」などの醸成へ直接的に作用するものであり、ここに鑑賞教育の平和教育への有用性が見出される。よって、本プロジェクトの授業案づくりは、小学校・中学校ともに対話を重視した鑑賞活動を中心に展開することを前提としながら、詳細な構成について先生方と協議を重ねていった。

マイクロ・マクロな「他者」への視点と授業案づくりの目的

平和教育との関連を考える上で、授業案の鑑賞は「対話」のほかに「作品情報」の扱い方にも注目した。作者、タイトル、制作年、主題など、作品を取り巻く情報は、国や時代、歴史、政治、文化、思想、流行などあらゆる分野へ繋がるものであり、作品世界を思慮する糸口となる。鑑賞者の自由な発想を重んじるVTSでは、そのような作品情報は鑑賞者へ提示しないこととしているが、本プロジェクトの授業案では、児童生徒がこれまでに自分が得てきた知識や経験をもとに、対話を通して自由に発想を展開するだけでなく、適宜作品情報を与えて児童生徒をさらに深い鑑賞へと誘う。

そこには、児童生徒が自分の知識外の情報に触れることで視野を広げ、作者の意図や作品がつくられた国・地域、時代、社会など、作品の背景にある見えないものへの関心を高め、身近なクラスメイトだけでなく作者や作品世界を含めた「他者」への想像力、思考力を養うねらいがある。さらには、作品世界と自分が身を置いている環境などについて、視点や思考を行き来させることで、過去につくられた作品と現在を生きる自分との、マイクロとマクロな視点が交差する鑑賞への発展をも期待する。そうして得られた視点は、鑑賞のみならず現代社会の多様な物事を捉える力になっていくことだろう。

映像作品など例外はあるものの、美術作品は音楽や演劇のように始まりと終わりがなく、一つのモノとして鑑賞者の眼

前に存在し続ける。色や形、素材、質感と、視覚的に人々へ働きかける表現と、そこに密接に関わる作者の存在、コンセプト、時代性などの情報という、見える・見えない要素を併せ持つ美術分野の作品だからこそ、何度でも作品に立ち返って、様々な角度から発想を膨らませることができるのである。そして、児童生徒が暮らす地域の美術館の所蔵作品を鑑賞授業の題材とすることで、地域の芸術文化の特性やコレクションの性質を知る機会にもなる。

また、このような児童生徒の繊細な感覚や発言を扱う鑑賞授業は、実施する環境にも気を配る必要があるだろう。美術館の展示室という非日常的な空間で初対面のエドゥケーターを指導者として行うよりも、児童生徒が日常を過ごす教室で、同じコミュニティを形成するクラスメイトと指導者の間で行われるほうがより効果的である。それは、児童生徒が慣れ親しんだ空間で見知った相手と作品をみることで、不必要に緊張せず気楽に発言することができるからである。些細なことかもしれないが、本プロジェクトがエドゥケーターの出張授業ではなく、各学校現場の指導者が主体で行う授業案をつくり、公開する理由には、そうした授業環境への配慮も含まれている。加えて、学習状況や児童生徒の個性、クラスの傾向に合わせて、授業実施のタイミングや鑑賞内容、授業時間の長さなどを調整できることも、学校現場で行う鑑賞授業のメリットとして挙げられるだろう。

おわりに―新しい美術館活用を目指して

これまで、鑑賞教育と平和教育との関連性と、授業案への展開について述べてきた。しかしながらここで、これまで述べてきた想像力、思考力などの鑑賞教育が子どもたちにもたらす能力は、継続的な経験によって培われていくものであることを断っておきたい。経験が子どもたちの内部に蓄積されることによってゆっくりと土壌が育まれていくのであり、一度きりの鑑賞体験では、子どもたちに気づきがあったとしても能力の向上や定着は難しい。

そういった意味では、先生方との協働によってつくり上げた小学校・中学校向け授業案も、児童生徒の鑑賞経験の一端、もしくはきっかけとなるものに過ぎない。だが、「鑑賞教育」と「平和教育」という、子どもたちの成長とこれからの未来に欠かせない学びを提供する授業として、実践を踏まえて小中学校向けのモデルケースをそれぞれ示せたことは、美術館にとっても、学校現場の先生方にとっても、今年度の取り組みの大きな成果といえる。

完成した授業案については、当館ウェブサイト上にて情報を公開し2023年度から一定期間、希望する学校現場へ作品画像などの鑑賞ツールとともに提供する予定である。児童生徒の来館や、エドゥケーターの出張などを必須条件としない授業案の公開は、長崎県内の遠隔地域の学校や、様々な理由で来館が難しい子どもたちに対しても新しい美術館活用の可能性を示すものであり、今後のさらなる発展に注力したい。

引用・参考文献

- ジョン・デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育』上・下、岩波書店、1975年
- 大高幸、端山聡子編著『新訂 博物館教育論』放送大学教育振興会、2016年
- フィリップ・ヤノウイン著 京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』淡交社、2015年
- 竹内久顕著『平和教育を問い直す―一次世代への批判的継承―』法律文化社、2011年

活動記録



1. 学校と協働した授業案づくり

① 鑑賞作品の選定

授業案づくりは、授業で取り上げる作品選びから始まりました。子どもたちの学習内容に合わせて継続的かつ発展的に実施できるよう、取り上げる作品を1点に絞り、同一作品を対象とした授業案を2種類つくることにしました。当館が所蔵する各作品の特性や、多角的な授業展開の可能性を考慮しつつ協議を重ねた結果、スペインの作家、エドゥアルド・アロージョによる絵画作品に決定。当館エドゥケーターが作品情報と鑑賞のポイントを整理したうえで、授業案づくりを協働する先生方との話し合いに臨みました。



エドゥアルド・アロージョ
《ハエの楽園、あるいはヴァルター・ベンヤミンのポル・ボウでの最期》
1999年 油彩・布、木、鉄 352×412cm © ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 G3153

エドゥアルド・アロージョ (1937~2018)

画家、彫刻家、舞台美術家。生地のマドリッドでジャーナリズムを学んだ後、1958年に兵役を逃れるべくフランコ政権下のスペインを離れてパリに留学し、そのまま同地に定住。ジャーナリストを目指しながらも、生活のために新聞の挿絵を描いたことをきっかけとして独学で画家となる。名画や広告、漫画からイメージを引用したり、巨匠の様式を借用したりするなどしたパロディ的表現で、当時のスペインの政治状況や、権威、慣習を批判・諷刺する作品を制作し、しばしば物議を醸した。フランコ死去の翌年にあたる1976年にスペインへの帰国が叶い、以降はマドリッドを拠点に活動した。

《ハエの楽園、あるいはヴァルター・ベンヤミンのポル・ボウでの最期》(以下《ハエの楽園》という)

ドイツ系ユダヤ人の文芸批評家・思想家、ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)はナチスの迫害から逃れるため1933年からフランスに亡命していたが、1939年9月に第二次世界大戦が始まると敵国人としてフランスの収容所に入れられるといった経験をし、1940年、パリ陥落を目前に同地から脱出した。南仏から渡米を計画するも、フランス出国ビザを取得できなかったため、非法にピレネー山脈を徒歩で越えてフランスと国境を接するスペインの町ポル・ボウへ入り、ポルトガルへ移動してリスボンから米国に出国しようと試みる。しかし、ポル・ボウに到着したベンヤミンは、数時間前に出された訓令によってスペイン国内の通行許可を得られず、その夜に自死を遂げた。

この悲劇的な出来事を題材とした本作は、ベンヤミンが命を絶ったポル・ボウの風景と、彼の肖像を組み合わせたもの。鮮やかな色面で構成された海辺の風景の上空に、ベンヤミンの二つの顔が左右対称に浮かび、右側のそれには眼鏡にヒビが入っている。ベンヤミンの顔の下に配された物体は、逆さになった黒い乳母車。画面の縁には、カラシ色の枠と黒いハエが描かれており、額縁にも、鉄などでこしらえた立体のハエが取り付けられている。ベンヤミンの眼鏡のヒビは彼の死を暗示しており、逆さまの乳母車もまた、死、あるいは不穏な世界情勢の象徴と思われる。ハエは、腐敗や死を連想させるとともに、規則的に整列する黒々とした姿によって軍隊的な、ひいてはファシズム的な国家権力のイメージを喚起する。かつて自らもフランコ独裁政権下のスペインにおける亡命者であったアロージョは、ここでベンヤミンに追悼の意を示すと同時に、悪しき「ハエの楽園」たるスペインを糾弾しているのである。

参考文献:福満葉子編「長崎県美術館名品図録」長崎県美術館、2012年、p.84、p.198

本作品を選んだポイント

- 「ハエ」「人物」「風景」など、それぞれのモチーフが単純化されつつも具象的に描かれており、美術作品の鑑賞に慣れていない子どもでも、作品のなかに気づきを見出しやすい。
- 実在の人物に起きた出来事をテーマとした作品のため、子どもたちの自由な発想による鑑賞だけでなく、必要に応じて作品の背景にあるものを示すことで、さらに鑑賞を深めることができる。
- 文学や芸術に通じるヴァルター・ベンヤミン、ホロコーストにおける人種差別や迫害、そして第二次世界大戦など、政治的・社会的な要素を併せ持つ作品であることから、図工・美術科に限らず国語科や道徳科、社会科などのつながりを意識した授業案づくりが期待できる。



額縁のハエ

額縁に取り付けられた立体のハエ。作者の手で一体一体つくられており、羽や足の角度などに個体差がある。



タッチ

山や海などの部分に筆の跡がはっきりと残っている。所々色と色の間に隙間があり、ちぎれ絵のようにも見える。



展示風景

352×412cmと鑑賞者を圧倒する大きさ。常設作品のため、年間を通して当館で作品を実見することができる。



指導者用資料「解説シート」「鑑賞シート」の作成

幅広い校種の先生方が鑑賞活動や授業に取り入れやすいよう、本作品の作者や主題等に関する情報と、鑑賞のポイントをまとめた指導者用資料を作成し、授業案とともに公開しました。授業案づくりの過程で、小中学校の先生方にも活用いただき、教員が利用しやすい情報量やポイントの整理方法などのアドバイスを受けて改良を重ねました。

② 授業案づくり

みて、考えて、話す、といった対話を伴う鑑賞活動を通して、児童生徒の自己・他者への想像力や思考力を養うことを共通の目的としながら、より具体的な授業の目標やアプローチ方法などについて、小中学校それぞれの先生方と話し合いました。各校種の年間の学習計画や、普段行っている授業の構成についても先生方のお話を伺いながら、実用的で汎用性の高い授業案の考案を目指しました。

小学校

授業案作成者：長崎市立大浦小学校 教諭 松浦憲子
授業案検討会：2022年8月6日(土)、9月7日(水)、10月7日(金)、10月29日(土)、11月2日(水)

アイデア出し

まずは展示室で《ハエの楽園》をみながら、予想される児童の反応を話し合ったり、作品情報や児童の学習状況などの情報交換をしたりした。その過程で「アロージョの境遇やベンヤミンが生きた時代の世界情勢を、小学生が複合的に理解することは難しいだろう」「鑑賞のポイントをどこに設定するか」「国語科で『たずねびと』を学ぶ5年生の後期に実施時期を設定してはどうか」など、様々な視点から意見が挙がった。



「一人で」から「みんなで」へ展開する鑑賞

「おそらく児童はまず、ハエや人物に興味を示すはず。そこから展開できたら…」という松浦先生の発言から、個人で観察する対象を一つのモチーフに絞り、各モチーフについてみんなの意見をまとめて作品全体を捉える鑑賞の流れを授業案に採用。児童が発想を広げたり、話し合いで意見をまとめたりする際の手助けとなるよう、イメージマップやKJ法といったブレインストーミングの手法も取り入れることにした。



中学校

授業案作成者：長崎市立淵中学校 教諭 森法子
授業案検討会：8月31日(水)、10月13日(木)、10月29日(土)、11月15日(火)、11月16日(水)

デジタルツールの活用

森先生は美術科の授業の初めに毎回作品鑑賞の時間を設けており、グループでの意見交換には生徒が一人一台持っているChromebookのGoogle Jamboardを使っているとのこと。Google Jamboardはクラウド上で複数人と共有しながら使えるデジタルホワイトボードであるため、他者との対話を重ねる今回の鑑賞授業でも有効なツールとして使用することにした。



作品と自分にじっくり向き合う鑑賞

「これまで授業で実施してきた鑑賞は、作品に対して生徒が自由な見立てをして感想を伝え合うだけで終わっており、作品の時代背景や作者の意図を考えると、どこまで踏み込めていなかった」という先生。本授業では、生徒が作品から受けた印象について「なぜ自分はそう思ったのか」と、これまで直感的に捉えていた気づきの根拠を探りながら、他者との対話や作品情報を踏まえてさらに自分の鑑賞を深める構成を意識した。



小中合同 授業案 ディスカッション

10月29日(土)開催の講演会「応答する平和教育のために―事実の継承と未来への応答」(本書p.28)の終了後、講演会に参加した松浦先生と森先生、そして当館エドゥケーターとでディスカッションをした。授業案づくりの進捗報告から、作者や作品タイトルを提示するタイミング、講演会の内容を踏まえた授業の組み立て方などについて活発な意見交換がなされ、それぞれの授業案の方向性がより明確になっていった。

小学校では、作品情報についてベンヤミンの最期に焦点を絞って伝えることで、児童が自由な鑑賞を展開しつつも、情報を受けて作品に描かれた人物の心情や作者の意図に思いを巡らせることを授業のポイントに設定した。一方中学校では、生徒が現在の社会情勢や、自分の身の回りの状況を関連づけて《ハエの楽園》の作品世界を想像することをポイントに設定し、小学校の授業からさらに一歩踏み込んだ鑑賞を目指した。



小学校

オープンエンドの授業

授業案づくりも終盤に差し掛かった頃、先生から「普段はどの教科でも一つの『まとめ』を提示して授業を終えることが多いが、この授業はまとめ方に悩む」と相談があった。そこで、この授業では鑑賞活動を通して得られた児童一人ひとりの意見を尊重し、クラス全体で共有するまでに止め、あえて一つの解釈に集約せずに終わる、オープンエンドの授業展開を提案した。



中学校

時間配分・ワークシートの作成

予備知識なしでの鑑賞、自分の気づきの整理、作品情報を受けてからの鑑賞、他者との意見交換など、授業内の数々の工程について、それぞれに割く時間の長さやより効果的な展開の順序を何度も組み替えながら調整した。授業案の構成に合わせて、ワークシートの構成や発問の内容にまで気を配り、授業案を詰めていった。



③ 授業実践と振り返り

作成した授業案をもとに小中学校で実際に授業を行い、学芸員・エドゥケーターも参観しました。授業後、外部有識者を交えた振り返りの場を設け、児童生徒の反応や学習の到達度について協議しました。発達段階や既習内容に応じて設定された各授業案の学習のねらいや授業展開の違いは、小学校から中学校への学びの連動でもあり、同じ作品を対象とした鑑賞授業の多様性を意識しました。

小学校向け授業案 「モチーフから想像する作品の世界と作者の思い」

対象：長崎市立大浦小学校5年生 計73名

指導者：長崎市立大浦小学校教諭 松浦憲子

実施日：1組:2022年11月10日(木)、11月14日(月) / 2組:2022年11月9日(水)、11月14日(月)

1 作品と出会う

作品画像をみながら「人の顔がある」「海や山がみえる」とまずは描かれているものを挙げていきます。見落としているものがないか、近くの人と確認もしました。



2 モチーフを一つ選び、よく観察する

見つけたモチーフの中から、自分が特に気になるものを一つ選び、各自のChromebookに入った作品の2D画像を使って細部をじっくり観察します。



5 考えを伝え合い、深める

選んだモチーフごとにグループをつくり、画用紙と付箋を使って、前時でまとめた各自の意見をグループ化したり、ポイントを整理したりしながらグループごとの意見をまとめました。



6 部分から作品全体へ視点を広げる

グループごとに意見を発表。黒板に意見を書き出し、各モチーフの意味の共通点や関係性から、作品の世界や作者は何を表現したかったのかなど、さらに想像を膨らませます。



学習のポイント

平和学習や人権学習の視点を含み、教科の枠を越えて学習計画を立てることで通年実施が可能になることから、小学校の授業は総合的な学習の時間に位置づけて考案。作品の表現や作者の意図を感じ取り、児童がお互いの見方や感じ方を大事にしなが鑑賞を深めることで自他を尊重する心を育むことを目標に、二部構成の授業とした。

授業展開

1時間目(45分間)

ねらい:モチーフに込められた意味を自分なりに感じ取る。

- ① 作品と出会い、描かれているものを整理する。
- ② モチーフを選び、よく観察する。
- ③ モチーフの様子からイメージを広げる。
- ④ 選んだモチーフが表す意味を考える。

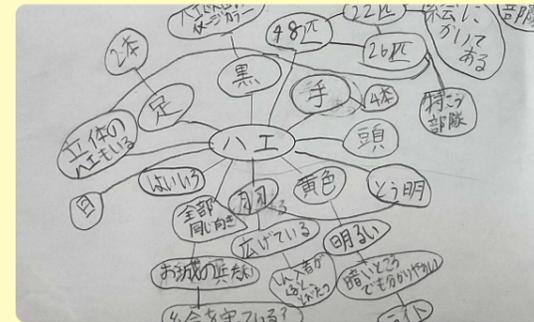
2時間目(75分間)

ねらい:それぞれのモチーフから作品全体を捉え、作者の思いを考える。

- ⑤ モチーフごとにグループをつくり、各自の考えを話し合う。
- ⑥ 各モチーフについてグループごとに発表し、部分から全体へ鑑賞の視点を広げる。
- ⑦ 描かれた時代背景など作品情報の説明を受け、さらに作品世界の想像を深める。
- ⑧ 作者が作品を通して伝えたいことは何か、自分の考えをまとめる。

3 マップを書いてイメージを広げる

児童の関心は「ハエ」「男の人」「ベビーカー」の3つに分けられました。選んだモチーフを中心に据えて、色や形などから想像されることをマップ状に書き出します。



4 モチーフが表す意味を考える

同じモチーフを選んだ人同士で情報交換しつつ、イメージマップを完成させます。各自で広げたイメージからモチーフが表現するものを考え、文章にまとめて1時間目は終了。



7 作品の情報を知る

先生から、作品のタイトルや作者、ベンヤミンの最期についてスライド資料による説明を受けます。児童は時代背景や迫害の歴史を知り、作品のみえ方がまた変化しました。



8 作者の思いを想像する

ここまで考えてきたことや、作品の情報を踏まえて、最後に作者が作品に込めた思いを考えて発表し合い、授業を終りました。



授業の振り返り

実施日時：2022年11月29日(火)16:30~18:00
 会場：長崎市立大浦小学校、長崎大学、長崎県美術館(オンライン)
 参加者：松浦憲子(長崎市立大浦小学校教諭)
 山岸利次(長崎大学人文社会科学域教育学系准教授)
 山口百合子、堀越蒔季子、福田美咲(長崎県美術館教育普及・生涯学習)



授業の手応え

児童の視野・発想の段階的な広がりを感じた

児童は初め、直感的な印象でしか作品を捉えられていなかった。しかし、個人の観察対象をまずはモチーフごとに限定したことで、一つの対象をじっくりみて自分の考えを整理し、話し合いやグループ発表を通して、みんなの意見を取り入れながら作品全体について考える流れができた。最後に作品タイトルやベンヤミンの最期など、児童が自分の知識の外にあった作品情報に触れ、そこからより一層作者が作品に込めた思いを想像する鑑賞活動が深まっていた。

積極的な話し合いが展開された

グループでの話し合いの際、単なる意見の出し合いに終わらず、「どうしてそう思ったの?」と意見の根拠を尋ねたり、手元の作品画像を使って説明したりと自分たちで話し合い、鑑賞を深められていた。また、出た意見の相違点を整理したうえで、様々な意見をどのようにまとめるか、という点についても各自が思考を巡らせながら丁寧に話し合いを進めており、自他を尊重する姿勢がみられた。

他教科の学びにつながった

後日実施した音楽科の授業で、『ハエの楽園』で感じた色の明暗と関連づけて曲調の明暗に言及したり、道徳科の授業で単元の内容について、ハエは「汚い」「嫌われ者」というような、モノがもつ象徴的なイメージについて発言したりする児童がいた。美術作品の鑑賞体験で得た知見が、他分野の芸術鑑賞や他教科の学習に活かされる様子を目の当たりにできた。



検討事項

①イメージの膨らませ方、想像へのつなげ方について

イメージマップづくりで、言葉だけのイメージを数珠つなぎに展開させ、視点が作品から離れてしまう児童がいた。また、あらゆる方向にイメージを広げた後に、作品のモチーフの意味を想像することに難しさを感じる児童もいた。

→【改善案】一つの言葉からの展開を複数考えて、枝葉を広げていくようにする。

イメージを広げつつ、作品のモチーフの意味を想像する過程もマップづくりに盛り込み、常に作品に視点を置きながら考える・想像する時間にする。

②作品情報の提示方法について

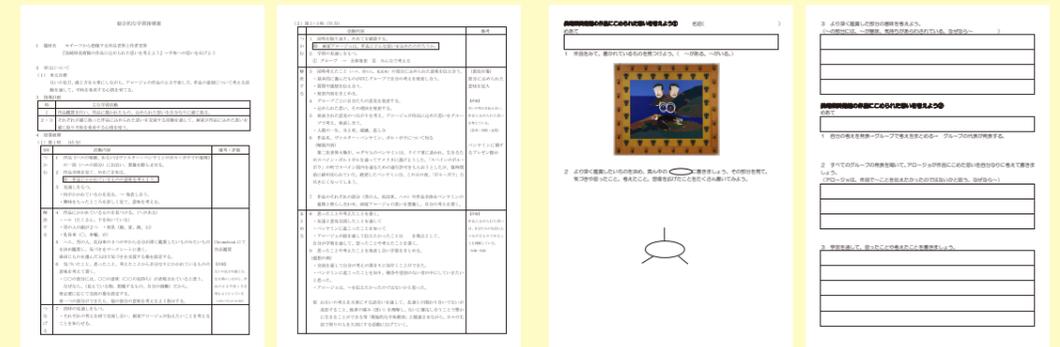
スライド資料による説明のみでは、5年生の児童には作品の歴史的背景の十分な理解は難しい印象を受けた。また、作者の「エドゥアルド・アロージョ」とモチーフの「ヴァルター・ベンヤミン」を混同してしまう児童もいた。

→【改善案】作品タイトルや作者、ベンヤミン、ポル・ボウなどのキーワードをまとめた資料も説明時に配付し、児童が見返して考えられるようにする。

作品の全体観を捉えて味わう、という学習が国語科で始まる5年生の3学期頃や、第二次世界大戦について学び始める6年生など、他教科に関連する単元の学習時期の前後に本授業を行うことも有効と考えられる。

授業案完成

授業の振り返りを経てさらに改良を加えた授業案を当館ウェブサイトにて公開しました。



授業づくりを終えて

長崎市立大浦小学校 教諭 松浦憲子



美術館との連携をさせていただいたことで、学んだことは、大きく2つあります。

一つ目は、「対話型鑑賞」です。対話型鑑賞の流れ(「①作品をよくみる」「②観察した物事について発言する」「③意見の根拠を示す」「④他者の意見をよく聴いて考える」「⑤話し合い、様々な解釈の可能性について考える」)で学習を仕組んだことで、子どもたちが自ら作品を多角的、多面的な視点から捉え、より深く作品世界に考えを巡らせることができました。その力は、図工の作品鑑賞のみならず、他教科の学習でも生かされ、モノ(資料や文章)をよくみて自分の考えを示すことができるようになってきています。また、グループで話し合う際に、互いの考えのよさを大切にしながら意見をまとめた経験も、他教科のグループ学習の中でも発揮されるようになりました。

二つ目は、「平和教育と鑑賞教育」の可能性です。間接的な平和教育の一環として対話型鑑賞に取り組みれば、豊かな人間的な情操や、人権意識、仲間意識を育てることができるような手応えを得ました。今後も、今回学んだことを活かした「対話型鑑賞」や「平和教育」に取り組んでいきたいです。

中学校向け授業案 「鑑賞で広がる世界とわたし ～『今』をつなげる美術のいとなみ～」

対象：長崎市立淵中学校1年生 計132名
 指導者：森法子（長崎市立淵中学校 教諭）
 実施日：1組 2022年11月29日（火）、11月30日（水）
 2組 2022年11月22日（火）、12月1日（木）
 3組 2022年11月22日（火）、11月29日（火）
 4組 2022年11月30日（水）、12月1日（木）

1 作品をみるポイントを確認する
 本授業では、色や形などの「造形」、モチーフの大きさや数などの「比較」、それらから連想するものなどの「発想」の3つにポイントを整理しながら鑑賞を進めます。



2 作品画像を分析的に観察する
 各自Chromebookで作品画像をよく観察し、気づいたことや疑問に思ったことを分類しながら、グループごとに共有しているGoogle Jamboardの付箋に色分けして書き込んでいきます。



5 様々な仮説に触れる
 「同じ人の顔が二つあって片方だけ眼鏡が割れているから、作品は理想と現実の世界を表していると思う」「小さな虫のハエが作品にたくさんいるから、小さな生き物の力や命の大切さを表現しているのではないかと、ワールドカフェ形式でそれぞれの仮説を伝え合いました。



6 作品の情報を得る
 ここからは、作品の情報も踏まえて考察。作者、ベンヤミンが生きた時代の社会情勢や晩年の足取りなどについて、地図や写真資料を見せながら説明し、生徒の理解を促しました。



学習のポイント

中学校の授業は美術科の鑑賞授業に位置づけ、小学校と同様に二部構成で考案。作品の表現や印象などを自分の視点で分類して考えを論理的に整理し、他者との対話を通して表現の意味を探ること。そして、作品の歴史的背景やベンヤミンの最期を知り、現在の世界情勢などを関連づけつつ、作品の表現から作者が作品に込めたメッセージを想像することを目標とした。

授業展開

1時間目(50分間)

- ねらい:分析的な視点で作品画像を観察し、作品が表すものを想像する。
- ① 作品をみるポイントを確認する。
 - ② 各自で作品画像を観察し、気づきを分類する。
 - ③ グループで意見交換し、他者の着眼点や気づきから自分の考えを広げるヒントを探る。
 - ④ 作品がどのようなことを表しているか、自分なりに仮説を立てる。

2時間目(50分間)

- ねらい:作品の背景を踏まえて、作品に込められたメッセージを考える。
- ⑤ 生徒同士で仮説を共有し、多様な見解に触れる。
 - ⑥ 作者、時代背景など作品情報を知る。
 - ⑦ 作者が作品に込めたメッセージを考える。
 - ⑧ 授業全体を振り返り、感想をまとめる。

3 分類した気づきを共有する
 「ちぎり絵のようだ(造形)」「二人の人物は双子かも(比較)」など、付箋をもとにグループで話し、自分とは異なる着眼点の意見に刺激を受け合いました。



4 仮説を立てる
 グループで出た意見を全体で共有し、もう一度作品全体をみます。これまでの分析を踏まえて、作品がどのようなことを表現しているのか、各自根拠を明らかにしながら仮説を立て1時間目の授業は終了。



7 作者の意図を考える
 もう一度作品に向き合い、作者が作品に込めた思いを考えます。人物やハエのみえ方が変わったり、それまであまり意識していなかったモチーフも気になり始めたり。作品画像に生徒の視線がより一層引きつけられていきました。



8 授業全体を振り返る
 これまでの分析や、作品情報を得て新たに気づいた表現から、自分が感じ取った作者のメッセージをワークシートにまとめて発表し、2時間目の授業を終えました。



授業の振り返り

実施日時：2022年12月21日(水)16:00~18:00
 会場：長崎大学、長崎市教育委員会、長崎県美術館(オンライン)
 参加者：森法子(長崎市立淵中学校教諭)
 山岸利次(長崎大学人文社会科学域教育学系准教授)
 宗淳一(長崎市教育委員会学校教育課指導主事)
 山口百合子、堀越蒔李子(長崎県美術館教育普及・生涯学習)

授業の手応え

論理的な思考を促せた

鑑賞の手がかりとして3つのポイントを生徒に提示したことで、直感的な発想が独り歩きすることなく、作品から得た自分の気づきを分析的に捉える、という思考の筋道を意識した鑑賞活動になった。これは、自分の意見に説得力を付与するだけでなく、他者との意見交換の際にも、相手の意見をその根拠とともに聞き入れ、意図を理解する力の育成にもつながっていたように思われる。

作品の世界と自分の世界とをつなげて鑑賞できた

同校のいじめ撲滅活動に取り組む生徒が、作品の情報を受けて「作品中のごつごつとした山々は国境や厚い壁を表している。このような厚い壁があったことを知ってほしいと思って作者はこの作品をつくった。(以下略)」と作品を捉え、そこから「今でも厚い壁となるものがたくさんあるから、(中略)誰もが自由に暮らせるような世界に変えていきたい」と感想をまとめた。ベンヤミンが受けた迫害や当時の社会情勢と、現在の自分が生きるマイクロ・マクロな世界の問題とをつなげて考えられており、鑑賞教育と未来志向の平和教育との結びつきを実感した。



検討事項

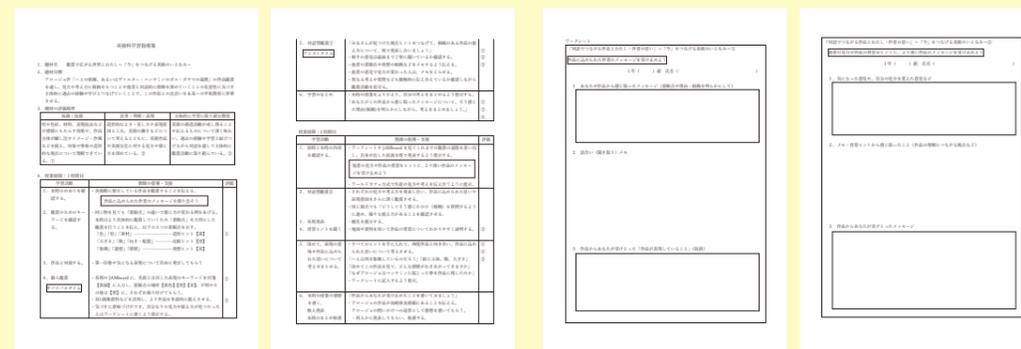
作品情報提示のタイミングについて

作品情報の説明後、生徒がもう一度作品をみて考える時間が短くなってしまい、作品の情報と表現との関連性を見出すことや、作者の意図を想像する活動を十分に深められなかった。新たな発見や疑問など、表現について他者と話し合う時間もあるとより深まったと考えられる。

→【改善案】仮説を立てるまでの時間を少し短縮し、1時間目の最後に作品情報を説明する。2時間目までに各自気になったことを考えたり、情報を調べたりする自主学習を促す。

授業案完成

授業の振り返りを経てさらに改良を加えた授業案を当館ウェブサイトにて公開しました。



授業づくりを終えて

長崎市立淵中学校 教諭 森法子



鑑賞活動を通し、生徒は自分の経験やインスピレーションを作品から得た情報と重ね合わせながら、作者の思いや考えなどを想像していきます。本来ならば、作者の思想や作品に込めた思いこそが真であり、それを読み解くことは真意に近づくものですが、美術鑑賞というものは「それだけではない」と改めて考えさせられる授業となりました。

一方で、これまでの鑑賞活動で大切にしてきた「生徒自身の見方や解釈」は、作品や作者の情報をタイミングよく提示することで格段に鑑賞視野が広がり、より深く自身の心を映す見方や解釈につながっていくことを実感しました。混沌とした現代社会を生きながら平和を希求する子どもたちにとって、鑑賞活動は最も影響力のある教育活動のひとつであると思います。作品と鑑賞の機会をいただけたことに心より感謝いたします。

2.テクノロジーを活用した

鑑賞ツール・遠隔交流プログラム開発



金谷一朗
(長崎大学情報データ科学部 教授)

授業案づくりと並行して、長崎県内の離島を含む各地域の学校現場に向けた当館所蔵作品の鑑賞ツールとして、作品の高精細3D画像の製作と公開にも取り組みました。さらに、地域の風土や博物館・美術館を知るきっかけづくりとして、ロボットを使った交流プログラムも実施しました。

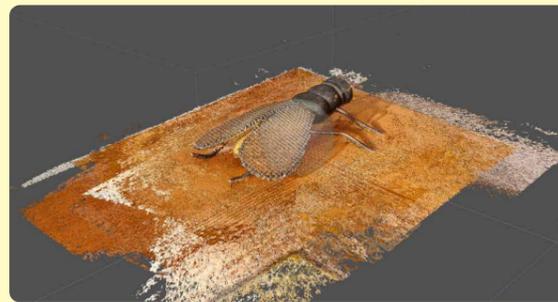
こうしたテクノロジーを活用した鑑賞ツールの開発や遠隔交流プログラムは、長崎大学情報データ科学部の金谷一朗教授と研究室の学生の協力によって実現しました。技術面のサポートだけでなく、企画内容についても専門的な見地からのアドバイスを多数いただいたことで、実験的でありながら今後の発展が大いに期待できるプログラムを展開することができました。

① 鑑賞ツール(高精細3D画像)開発

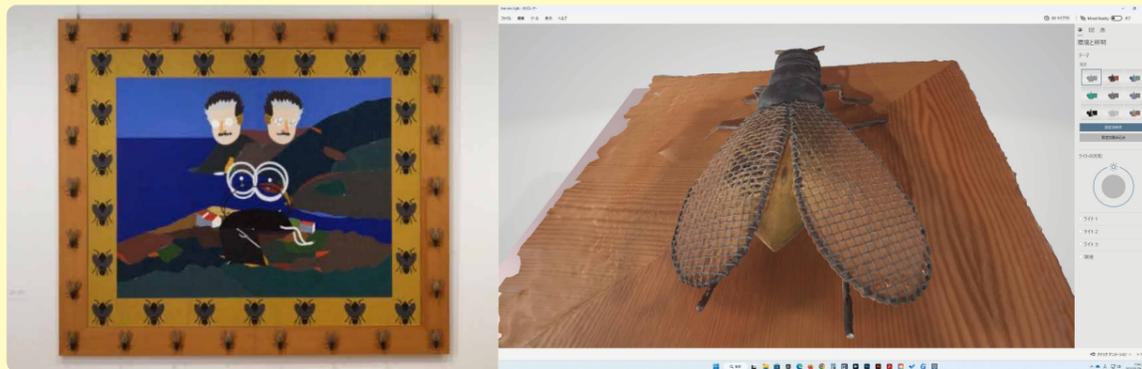
本事業で取り上げたエドゥアルド・アロージョによる絵画作品《ハエの楽園》は、立体的なハエのモチーフが取りつけられた特徴的な額縁も含めて一つの作品となっています。作品を真正面から撮影した2D画像だけではその立体部分に気づきにくいことから、試行錯誤を重ねてハエの立体部分を撮影した画像から3D化し、あらゆる角度からの観察を可能にしました。



撮影



編集



作品の2D・3D画像。ともに拡大・回転が可能。

鑑賞ツールを活用した遠隔鑑賞プログラム 「アロージョさんのさくひんをみてみよう！」

実施日時：2022年12月 ①13日(火)10:00~11:00 ②14日(水)13:30~14:30
会場：幼保連携型認定こども園 ①有家たちばなこども園 ②たちばなこども園、長崎県美術館(オンライン)
対象：年長児 計18名

南島原市のこども園に協力いただき、鑑賞ツールの試験運用を兼ねて長崎市の当館と同園を結ぶ遠隔鑑賞プログラムを実施しました。画像で作品全体をみたり、部分ごとにみたりすることで園児の視点や発想がどんどん変化し、園児同士がお互いの発言を受けつつみんなで作品世界の想像を膨らませる姿がみられました。

また、園児や先生の反応から、①作品画像を拡大・回転することで、展示室の実作品ではみられないほどの近距離、角度からの鑑賞が可能になる、②場所を選ばないため、普段生活する教室で行うことで鑑賞者が緊張せずに鑑賞・発言できる、という作品画像による鑑賞ならではの利点に気づくことができました。



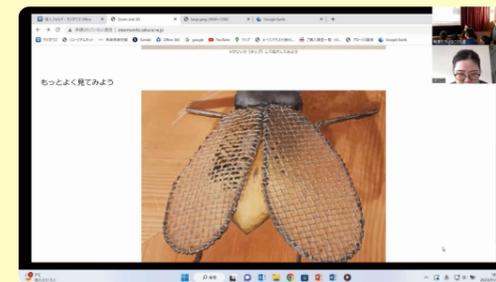
全体をみる

スライド資料で作家を紹介した後、まずは2D画像で全体をみます。園児は「おじさんが二人いる」、「虫がいっぱいで、二種類いるみたい」と気づいたことを次々に教えてくれました。



モチーフごとにみる

2D画像を拡大してモチーフごとに観察。「二種類の虫」にみえていたものが、「ハエとコオロギかな/ハエと蚊かな」「描かれているのと、描かれていないのがある」と、表現の違いが気になり始めます。



3D画像をみる

次にハエ部分の3D画像をみると「おなかの部分はピーナッツみたい/粘土かもしれない」「羽根に穴が開いているのは、針金だからかな」と、質感や素材に関する発言が多くなりました。



作品世界を想像する

園児は各モチーフを観察していく過程で、自然とそれらを結び付けて考えるようになりました。最後にもう一度作品全体をみて、作品の世界を想像し、話し合って鑑賞を終えました。

② テクノロジーを活用した 美術館・博物館の遠隔交流プログラム 「ロボットとめぐるミュージアムツアー！」

実施日時：2022年11月3日（祝・木）13:00～15:30
会場：岐阜市立一支国博物館、長崎県美術館（オンライン）
対象：長崎県内の小学3～6年生18名
機器協力：iPresence合同会社

より充実した遠隔交流プログラムの実現を目指して、Web会議システムと遠隔操作機能を併せ持つテレプレゼンスロボット「Double3」*を導入したプログラムを、岐阜市立一支国博物館と連携して実施しました。各会場に1台ずつロボットを配置し、参加者はチームごとに自分がいる施設を案内する「ナビゲーター」役と、相手の会場のロボットを遠隔操作する「パイロット」役に分かれて、数百キロ離れたお互いの施設を探検し合いました。

自分が住んでいる地域の特徴や博物館・美術館の相違点について、子どもたちが認知する機会になったほか、ロボットの導入によって、施設の様子を「見せる/見せられる」という一方的な活動ではなく、自らの操作で「見に行く」というより能動的な体験の場を提供することができました。遠隔地との交流だけでなく、今後は高齢者施設や医療施設などとの交流の可能性も感じさせるプログラムとなりました。

*テレプレゼンス:遠隔地の人と対面しているような臨場感を醸し出す技術。



テレプレゼンスロボット「Double3」



両館のスタッフと金谷一朗氏を交えて、ロボットを借用したiPresence合同会社よりロボットの機能や操作方法についてレクチャーを受けました。

1 まずは会場ごとにロボットの操作練習と、自分がいる施設のどのような魅力を相手会場の参加者に伝えるか、スタッフと施設を見て回りました。来たことのある施設でも、意識してみると新たな発見があります。



美術館



博物館

2 各会場の参加者を「ちゃんぼんチーム」「人面石チーム」の2つに分け、いよいよお互いの会場のロボットを操作して探検を開始。ナビゲーター役は施設各所の特徴を紹介しながらパイロット役を誘導します。



美術館 / 人面石チーム:パイロット



博物館 / 人面石チーム:ナビゲーター



美術館 / ちゃんぼんチーム:ナビゲーター



博物館 / ちゃんぼんチーム:パイロット

3 ナビゲーターとパイロットの役割を交替して探検。行ったことのない施設の様子に、パイロットたちは興味津々です。ロボットを介して「あれは何?」「どうしてそうなっているの?」とナビゲーターたちとの会話も盛り上がりました。



美術館 / 人面石チーム:ナビゲーター



博物館 / 人面石チーム:パイロット



美術館 / ちゃんぼんチーム:パイロット



博物館 / ちゃんぼんチーム:ナビゲーター

4 探検を終え、感想を伝え合いました。短い時間でしたが、「施設の雰囲気が全然違って」「行ってみたいになった」と、子どもたちは活発な交流を通してお互いの地域や博物館・美術館への関心がとても高まったようでした。



美術館



博物館

参加者の声

一支国博物館会場

ロボットをそうさしながら長崎市の友達と話したりたいけんができたのでうれしいです。いつか長崎市にいったりしてみたいなりました。大きいハエや絵にびっくりしました。もっと話したりしたかったです。

チームのメンバーで知らない子と友だちになれたこと、長崎市の作品、どうい場所かわかり、ちがい・同じところが見つかったいい体験でした。

一支国博物館会場

長崎県美術館会場

いきの知らないことをたくさん知れてよかったです、美術館のことを教えてコミュニケーションがとれて楽しかったです。

長崎県美術館 副館長
河合恭典

今回は、長崎県美術館さんにお声かけをいただき、連携してロボット事業を行いました。一支国博物館では、展示事業を除いて、こういった他館との連携事業は珍しいのですが、同じ長崎県内の美術館・博物館で行えることは、大きな期待と喜びを感じさせるものでした。

ロボットを使った遠隔事業という内容は、コロナ禍で唐突に日常化したリモートワークや会議などの世情を反映させるかの様にも感じますが、そういった流れの最先端の事業に身を置けたことは、一支国博物館にとって有意義で今後の財産となったと考えます。また、離島に所在するというデメリットを有する一支国博物館にあっては、今後、様々な事業を展開していくうえで、大きな可能性を感じる事業となりました。

長崎国際大学人間社会学部国際観光学科 准教授
尾場均

コロナ禍により遠隔教育は急速に広まり、従来の授業動画の視聴から双方向性も重視されるようになりました。

その中で、今回のロボット事業(遠隔教育プログラム)は美術(芸術)・平和というテーマを通して、生徒に本物(本質)を伝え、そしてオンライン上でお互いが能動的に学習に参加する実践でした。

今後、従来の双方向でのコミュニケーションだけでなく、本質を伝えることはもちろん、オンライン上で自ら考え、共に学び合う教育の実践を期待します。

コラム

STEAM教育における大学と美術館の協働の可能性

金谷 一郎 / 長崎大学情報データ科学部 教授

「STEAM(スチーム)教育」という新しい教育分野が提唱されています。これは科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、数学(Math)の4分野を指すSTEM(ステム)にリベラル・アーツ(Arts)を組み合わせた教育分野です。STEM教育というのは、米国における「理系教育」のような位置づけで、ネーミングには「科学・技術・工学・数学こそが国家の基幹(ステム)だ」という主張も込められていました。

ところが、米国最高の美術大学とも言われる「ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン」の学長であったジョン・マエダ教授らが「STEM to STEAM」(ステムからスチームへ)という運動を2000年代はじめに展開し、徐々にSTEAM教育の重要性が米国へ浸透していきました。ジョン・マエダはマサチューセッツ工科大学(MIT)でソフトウェア工学を専攻していた、元「STEMのひと」なので説得力があったわけですね。

STEAMのAはアートのAなのですが、現代の言葉で言えば「リベラル・アーツ」と呼んだほうが正確です。もともとアートには「美術」以外に「技術」という意味もあります。リベラル・アーツは「自由人として生きる技術」というふうに読み替えるとうわり良いでしょう。

古代ギリシア、そして古代ギリシアの影響を強く受けた古代ローマでは、リベラル・アーツとして次の科目を挙げていました:文法、絵画、幾何学、算術、歴史、哲学、音楽、医学、法律、天文学。随分とたくさんありますね。これらの科目は中世になると文法学、論理学、修辞学の基礎3科目と、算術、幾何、天文学、音楽の上位4科目へ整理されていきます。基礎3科目は「論理国語」「文学国語」に、上位4科目は「数学」「理科」「芸術」に相当します。

リベラル・アーツの中の「数学」「理科」はそれぞれSTEMのMとSと重複しますから、STEAMのA成分は「国語」と「芸術」となります。もう少し広く「人文学」「芸術学」と捉えても良いかもしれません。

ジョン・マエダは、STEMという理系分野だけを考えているのは、その技術の使い所を見失うと警鐘を鳴らしました。一方で、美術家が美術だけを考えていても、美術は本来の目的を見失うのではないかと彼のTEDトークの中で述べています。そこで彼はSTEMにAを加えようと主張したのです。

さて、日本にはSTEM系の大学生が大学生全体の約2割ほどいるそうです。STEM系の学部は、国公立あわせて240程度あります。本来であれば、このSTEM系学部を全部、みーんな、思い切って、STEAM系にしていくべきなのです。そうしないと、技術の方向性を見失ってしまう。

しかしながら、大学のカリキュラムや教員構成は急には変えられません。大学に「教養部」が設置されていた時代は、教養部がAの役割を担っていたとも言えるのですが、当時と今ではSTEM系学問分野も変わっていますし、いまさら教養部を復活させるのも難しいでしょう。

そこで、我々は大学と美術館との協働を考えています。

日本の美術館はいくつあるかご存知でしょうか?文科省による令和3年度の調査によると、日本には456の美術館があります。地域的な偏りはあるものの、STEM系学部と協働していくことが可能な数です。

では実際に、どんな協働が考えられるでしょうか。ここでは具体例をひとつご紹介しておきます。

長崎大学情報データ科学部のメディア・アート&デザイン(MAD)研究室と、長崎県美術館と、長崎市立一支国博物館(一支博)とで行った体験型イベントをご紹介します。本イベントは、長崎県美術館と一支博の間をインターネットで結び、遠隔操作ロボットを使って、子どもたちがお互いの美術館、博物館を紹介し合うというものです。イベントの詳細はぜひ長崎県美術館の報告を読んで頂くとして、本イベントに参加した長崎大学の学生たちの「学び」を披露させていただきます。

大学のSTEM系研究室で生み出されるものは、10年、下手をしたら100年待たないと、人類の幸福に結びつかないことがありますし、残念ながら徒労に終わってしまうことも多いです。そんなとき、どうやって研究の方向性を決めたら良いのでしょうか。大学の入学試験には正解がありますが、大学の研究の正解は10年も100年も待たないとわからないのです。そして、その正解を待っている「問い」そのものを、研究室の大学生たちは見つけたいといけません。

もうお気づきかもしれませんね。そんな正解を待っている「問い」を集めた施設こそが、美術館なのです。

本イベントに参加した学生たちは、子どもたちの遠隔ロボット操作の企画をお手伝いしながら、短期的にはイベント運営やロボット工学、ネットワーク情報学の実践を学びました。しかしそれ以上に、長期的に、美術館や博物館を通して「問い」の立て方—STEAM教育が最も教えなければならないこと—を学んだのです。

STEAM教育は、ここ長崎でも少しずつ芽を出し始めています。もし身の回りに、美術館に行っことがないというSTEM系の学生、あるいはSTEM系を目指す生徒がいれば、美術館を訪ねることを勧めてください。

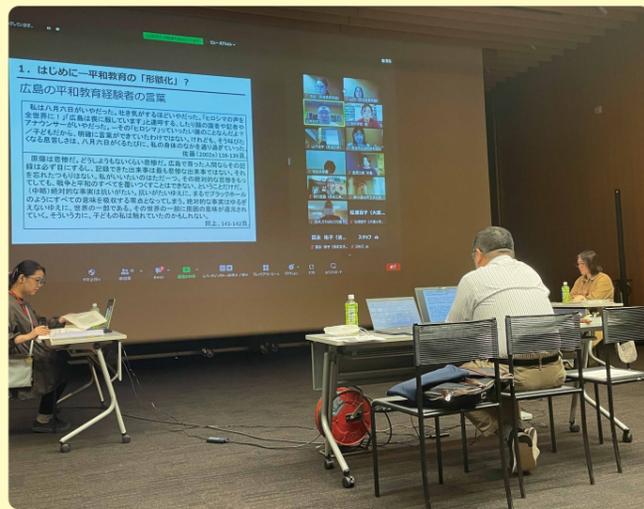
3・教員向け講演会

「応答する平和教育のために一事実の継承と未来への応答へ」

講師：山岸利次（長崎大学人文社会科学域教育系准教授）
 実施日時：2022年10月29日（土）13:00～14:30
 会場：長崎県美術館（オンライン）
 対象：長崎県内に勤務している先生 15名

本プロジェクトの重要なキーワードである「平和教育」について改めて考える場として、長崎大学の山岸利次氏を講師に迎えたオンライン講演会を実施しました。平和教育の歴史的展開を踏まえて、過去の争いや戦争を事実として学ぶことと並行して、その事実を現在・未来につなげて考える力を育成することの重要性についてお話いただきました。

さらに、当館エドゥケーターも交えて、平和教育と鑑賞教育とのつながりについてもお話を展開していきました。保育園から大学まで幅広い校種の先生方に参加いただき、講演後には、各校の平和教育に関する取り組みの状況や、指導者として平和教育にどのように向き合うかなどについて、校種の垣根を越えた意見交換がなされました。



参加者の声

毎年夏になって「戦争」と聞くと、特に幼少期の子どもたちからはすぐに「怖い」という言葉が出がちです。ただ、今回「間接的平和教育」「広義の平和教育」といったお話を伺い、未就学児の子どもたちにはその観点での「平和教育」ができるのではないかと思います。個人的にも、子どもの頃から長年受けてきた「平和教育」に対するモヤモヤした気持ち（思考停止や責任問題）が、今回の講演を聞いて少し晴れました。（こども園）

当方の担当する言語教育では、政治や宗教に関わる内容はタブー視されることがあります。確かに、現在進行形で戦争や災害の当事者になっている学習者もいる可能性があるため、そのような内容を扱う際には、十分に配慮する必要があると考えます。しかし、タブー視して触れないようにするということが疑問を感じておりました。タブー視される背景には、例えば、今回のお話の中の狭義の意味で平和教育をとらえるような視点があるのではないかと感じました。言語教育の中で、平和教育をどのようにとらえ、実践していくかを考えてみたいと思います。（大学）

平和教育のことだけを考えたことがなかったので、いい機会になりました。山岸先生にドイツの例も参考に平和教育について体系的に教えていただき、勉強になりました。先生の未来思考と美術作品を通じたコミュニケーションのお話は教育現場にいて、明るい気持ちになりました。（高等学校）

※文末の（ ）は参加者が所属する校種・団体等を示す。

4・沖縄視察

2022年に本土復帰50周年を迎えた沖縄県の「平和」への取り組みについて、美術館や資料館を視察しました。本プロジェクトの今後の展開を考える上で大変貴重なお話を伺う機会となりました。

沖縄県立博物館・美術館 視察日:2022年9月23日（祝・金）

本土復帰50周年記念として、沖縄県立博物館・美術館では1年を通して数々の展覧会が開催されました。美術館副館長の大川剛氏に平和教育や学校連携についてお話を伺いました。博物館で過去の資料から歴史を「振り返る」だけでなく、沖縄で戦争や平和をテーマに制作する若手作家の作品を取り上げながら、沖縄の過去・現在・未来を鑑賞者に「考えさせる」展示空間づくりにも取り組まれているとのこと。来館者の住民意識を高めると同時に、地域の若手作家への活動機会の提供にもつながる、大変興味深いお話でした。



佐喜眞美術館 視察日:2022年9月21日（水）



佐喜眞美術館は丸木位里（1901-1995）・俊（1912-2000）の作品を14点所蔵しており、なかでも《沖縄戦の図》（1984年）を1994年の開館以来展示・公開し続けています。平和学習の目的で同館を利用する学校団体も多く、職員の解説を聞きながら作品を鑑賞し、屋上から米軍基地を見学する「修学旅行コース」を毎年実施しています。丸木作品の鑑賞について、館長の佐喜眞道夫氏にお話を伺ったところ、平和に関する資料ではなく創作物として作品を捉え、作品の制作過程や表現から、作者の思いや作品世界を理解し想像する鑑賞を意識されているとお話いただきました。

沖縄県平和祈念資料館・ひめゆり平和祈念資料館 視察日:2022年9月22日（木）

1945年に激しい地上戦が繰り広げられた糸満市に建つ沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館の両館では、沖縄の地が戦場になった経緯や戦争の激化による暮らしの変化などについて、当時の映像や証言者の肉声資料、ガン（洞窟）の再現など様々な資料によって展示が構成されています。また、沖縄県平和祈念資料館には世界各国の人々の生活や貧困、地球環境などの問題に関するコーナーも設置されており、より広く深く平和について考えるための設備が充実していました。



5・シンポジウム

「学校とミュージアムの共創
—平和教育と鑑賞教育のこれからを考える—」

実施日時：2023年1月7日(土)13:15~16:00

会場：長崎県美術館 ホール

対象：長崎県内に勤務する先生、大学生、博物館関係者 31名

つくり上げた授業案や鑑賞ツールを広く周知し、学校現場で活用していただくため、今年度のプロジェクトの成果を発表するシンポジウムを開催しました。

こども園から大学まで幅広い校種の先生、大学生、博物館や研究施設の関係者など多くの方に来場いただき、各発表に対して非常に多くの感想・質問・意見をいただきました。授業案や鑑賞ツールについて、自身が所属する学校で利用する場合のアイデアや、社会包摂の観点を取り入れた発展的な活用について言及されているもの、学校とミュージアムの連携を考える場の継続的な提供を望むものなど、様々な立場や視点からの声が上がりました。次年度へ向けて、学校との連携とプロジェクト内容のさらなる進展を予期させるシンポジウムとなりました。



スケジュール

13:15-13:30 はじめに 山口百合子(長崎県美術館 事業企画グループサブリーダー)

【第一部】

13:30-13:45

レクチャー

「応答する平和教育のために」

山岸利次

(長崎大学人文社会科学域教育学系 准教授)

13:45-14:25

プレゼンテーション

小学校向け授業案「モチーフから想像する作品の世界と作者の思い」

松浦憲子(長崎市立大浦小学校 教諭)

中学校向け授業案

「鑑賞で広がる世界とわたし~『今』をつなげる美術のいとなみ~」

森法子(長崎市立淵中学校 教諭)

14:25-14:35 休憩(リアクションシート記入・回収①)

【第二部】

14:35-14:50

プレゼンテーション&事例紹介

「大学×鑑賞ツール開発—高精細画像の製作と公開」

堀越蒔李子(長崎県美術館 エducator)

14:50-15:05

事例紹介

「大学×遠隔交流プログラム

—ロボットとめぐるミュージアムツアー!」

金谷一朗(長崎大学情報データ科学部 教授)

山口百合子(長崎県美術館 事業企画グループサブリーダー)

15:05-15:15 休憩(リアクションシート記入・回収②)

5

15:15-15:50

パネルディスカッション&質疑応答

「平和教育と鑑賞教育のこれから」

パネリスト:山岸利次、松浦憲子、森法子、金谷一朗、山口百合子 モデレーター:小坂智子(長崎県美術館 館長)

15:55-16:00 おわりに

参加者の声

リアクションシートより

第一部について
ミクロとマクロの平和教育をつなぐ、その中で他者への応答能力を高めるという核の部分を発表からよく知ることができた。二項対立(あるいは脱構築)的な歴史、そうした大きな物語からゆるやかに子供たちを解放しつつ未来へと主体性を開いていく感覚は、まるで視野を広めて見たり、細部を拡大してみたりする作品の鑑賞のイメージそのものだと感じました。「生と死」「平和と戦争」など人間や社会の複雑なものを解決することを急がず、複雑なままでもかかわり続けることができるという可能性を授業案で感じることができた。また、活動した児童生徒の高い思考力について大変感心したのと同時に、すでに身につけている力をいかに活用するかという基本に立ち返ることができてよかった。(高等学校)

第一部について

平和教育を鑑賞で行うという考え方が私にとっては新しい視点でした。また、間接的に平和につながる授業の例としてとても興味深かったです。戦争や紛争についてのイメージを発信している絵画作品はたくさんあり、抽象的なものを取り上げることで子供たちの想像力を養うとともに、事実を知ること自分の見方や考え方を深めることができると感じました。私個人の考え方としては、作品の背景を段階的に少しずつ出していくことで焦点をより絞って鑑賞できると思いました。(小学校)

第一部について

平和教育のイメージとして、昔おきた戦争について学ぶことが主だと思っていたが、ミクロな平和、子どもたちの世界、社会について勉強する必要があるという話に納得した。知らない人が困っているときに手を差し伸べる責任能力が自分にはあるのかと考えさせられた。[中略]自分の身の回りの差別等を学習として取り上げることはよいと思う。子供のころ、特に小学校の頃はあまり広い世界のことに関心はなかった。それよりも自分の周りの世界がすべてで、嫌われたり無視されたりすることを恐れていた。(大学生)

第二部について

本プロジェクトに期待すること—アンケートより

- ・対話型鑑賞をしている様子をみてみたいです。教員(美術教育をしている方)へ向けた講座があれば年間を通して学んでみたいと思います。
- ・他県からでも、今回の活動が見られるようにしていただけたら嬉しいです。
- ・広島での取り組みなど、同じ被爆地ではアートや鑑賞×平和教育でどのようなことが行われてきたのかも知りたいと思いました。
- ・来年度の企画、プログラムで協力できることがあれば参加させていただきたいです。高校で国語を教えているので、他教科との協働でプログラムがあればうれしいです。

第二部について

〔遠隔交流プログラムについて〕様々な成果が得られたプログラムで素晴らしいと思いました。VR・ARを利用した被爆証言会を行ったことがあるのですが、どうしてもテクノロジーの面白さが勝ってしまい、伝えたいことが十分に伝えられなかったことがありました。その辺の難しさを知りたいです。(研究機関)

※〔 〕は編集者による編集・補足、文末の()は回答者が所属する校種・団体等を示す。

編集後記

本プロジェクトにおいてどの作品を題材としてピックアップしようかと考えたとき、真っ先に頭に浮かんだのは、エドゥアルド・アロージョの《ハエの楽園、あるいはヴァルター・ベンヤミンのボル・ボウでの最期》でした。それは当館の常設展示5室の出口付近にいつも展示しており、私自身これまで日常的に目にしてきた作品です。幼稚園児から大人まであらゆる年齢層の方々とおしゃべり鑑賞を重ね、私の目に焼き付いている印象深い作品のひとつでもあります。あるときスクールプログラムで訪れた先生が《ハエの楽園》を見ながら、「いつもこの場所であって出口に向かって行く私はなんだか見られている気がしてすごく気になる作品だ」と言われました。352×412cmという大きなこの作品は、行き来する鑑賞者を何ときも見つめていたのかもしれませんが。その言葉を聞いた瞬間、私の中で作品が「そこにある」から「そこにいる」という感覚へと変わりました。作品を今までそんなふうに見たことがあったらどうか、と自問すると同時にこの作品には、もっと何か深い意味があるのかもしれないという思いも沸き起こりました。そこから鑑賞活動を通して作品が放つメッセージを子どもたちが能動的に受け止めてほしいという私たち（先生と美術館）の思いは授業案作成に向かいました。

小中学校ともにこの鑑賞活動において「対話」を外すことはできません。それは作品との対話、他者との対話、そして自分との対話が一連の流れの中で多発的に生まれ、それが多様な見方を引き出し、より深くモノを見る力を育てるからです。

学校という協働学習が可能な環境は、対話でつながることができる土壌がすでに存在し、ひとりの力では到達できない領域まで引き上げてくれます。教室という慣れた空間のなかで得られる日常の学びと、少し緊張しながら作品に囲まれた美術館での非日常の学びには、それぞれ異なる意味や価値があり、子どもたちがこのような体験ができる空間や時間を創出することが大切です。美術館は持ちうる専門的知見を活かした鑑賞ツールの開発や提供を行うことで先生方の教材研究の一助となればと思っています。

私たちは長崎県美術館に《ハエの楽園》が展示されていること、そして本作品の魅力を知っていただくことから丁寧に発信していかねばなりません。さらに長崎県内外を問わずより多くの方々へ本プロジェクトの意義を伝え、鑑賞教育のひとつのアプローチ方法を示していくことがとても重要だと考えます。それが長崎における、そして未来につながる平和教育の一端を担うことにもなるのではないのでしょうか。

これまで幾度となく見続けてきた《ハエの楽園》ですが、何度みてもそのたびに新しい発見が生まれ考えさせられる作品です。それがまた鑑賞教育の醍醐味だと感じながら《ハエの楽園》が長崎県美術館のあの場所にいる意味をこれからも問い続けることでしょう。

山口百合子(長崎県美術館事業企画グループサブリーダー)

令和4年度文化芸術振興費補助金 Innovate MUSEUM事業
学校とミュージアムの共創—平和教育と鑑賞プログラム開発

企画・編集 | 山口百合子・堀越蒔李子(長崎県美術館教育普及・生涯学習)

デザイン | 古庄悠泰(景色デザイン室)

印刷 | 株式会社インテックス

発行 | 学校と共創する美術で学ぶ平和教育実行委員会

〒850-0862 長崎市出島町2-1(長崎県美術館内)

発行日 | 2023年3月25日